

13. 社会の変化を見据えての次世代の防災は？

わが国だけではありませんが、いずれはどこでも少子高齢化が進んで社会の構造が変化していきます。そのために、あらゆるところで人材不足が起こります。特に、暮らしを支えていく前線にあるところの実働力が低下します。あらゆる分野での研究、開発、実施、管理に関して、すべてがIT依存ということは不可能です。となると、これまでの経済や暮らしのレベルの拡大・成長ということに翳りが出てくるのでしょうか。

それにしても、われわれの暮らしの基本の基は、災害列島で安心してさまざまな活動が出来ることです。災害のたびにその復旧復興で精一杯ということではいけません。しかし、そんないつ起きるかわからないものに精力を尽くせるほどの余裕が無いと思われる方も、大災害を経験して初めて、それこそ命が一番ということを認識します。そこで、国土強靱化策としてさまざまな方策を行っていますし、これまでのことをスピードアップしようとしています。しかし、その進捗度には誰もが満足していません。

現実、気候変動や気象変化が激しい状況下では、設計どおりの安全性が確保できるかどうか懸念されています。われわれは、実は自然の領域にコミュニティという共同体で暮らしているわけで、それが個人というか人の存続にかかわっています。つまり、われわれの暮らしは自然やコミュニティに依存しており、それを阻害することは存続を危うくするものになります。もしその兆候があるなら修正する必要があります。災害リスクがあるところは避けるか、どうしても依存するのであればシステムを破壊させない方策のみが許されることになります。それには情報の活用、代替技術、機能の集約などの知恵や工夫を駆使することが必要となります。

そして、その中核となるのは科学技術で、基礎科学ないし理論の確立(メカニズムの解明)、技術的応用や革新、修正、技術面での発展と社会的普及の同時進行、そして不適合の修正、開発、改革というプロセスを繰り返すこととなります。そのプロセスを途中で停止することは負荷になって残ります。自然災害への対応でもこの不適合が生じていて、その被害というか影響の度合いを大きくしているように思われます。自然災害が厄介なのは、突発的に起きること、起きてはじめてその背景が理解できるということ、決してなくならない永遠のものであることです。

どうして、被害が繰り返されるのだろうか、その一つは、自然災害の本質を理解していないか、関心がないからではないかと思います。そのためにも、学校教育の中で

自然災害の基礎を必修として、災害列島に暮らすことを意識させることが欠かせない
と思います。防災は事前の対策を確実にすることで、復旧も早く、投資も少なくでき
ます。